

声優・女優

野沢雅子

NOZAWA Masako

『ドラゴンボール』（注1）の孫悟空や『ゲゲゲの鬼太郎』（注2）の鬼太郎など、数々の大ヒットアニメで声優として活躍する野沢雅子さん。舞台俳優を目指した一〇代のころ、洋画の吹き替えから声優の世界に入り、半世紀以上のキャリアを積んできた。長年の経験から、どのような演技メソッドを体得したのか。「声で演じる」ことで生まれた喜び、そしてアニメや声優の力など、印象深いエピソードとともに語っていただいた。



日常の観察が生きる「声の演技」

洋画の生吹き替えからアニメの世界へ

—— 幼いころから夢は女優、なかでも舞台女優を目指されたそうですね。

野沢 ええ。物心がつく前から子役として映画に出ていました。叔母（佐々木清野^{きよの}）が松竹蒲田撮影所の大スターだった。それで、私のマネージャーをしてきていたんです。私にとっては普通の叔母でしたけど、小津安二郎監督のことを「おっ

ちゃん」と呼んだりしていて、若いころはすごかったんだよと聞かされていました。

叔母は私に自分と同じように映画女優にさせたいと思っていたようでした。でも、私は舞台の芝居がやりたくて、高校生のときに叔母に反対されながらも劇団に入ったんです。映画女優より、お客さんが目の前にいる舞台の役者になりました

かった。セリフを間違えても撮り直しができない、一回一回が勝負の舞台の世界に進むんだ、などと今から思うと生意気なことを言っていました。

—— 声優の活動は、どのようなきっかけで始められたのですか。

野沢 昭和三十年当時は、まだ声優という言葉すらありませんでした。所属していた劇団から声がかかり、アルバイト感覚でテレビの洋画の吹き替えをしたのが最初です。モニター

を見ながら原音を聞いて、声を当てます。今と違って全て生本

（注1）ドラゴンボール

鳥山明が『週刊少年ジャンプ』で連載し、大ヒットした漫画をテレビアニメ化。一九八六年二月から八九年四月まで、オリジナルの展開も加えながら放映された。続編の『ドラゴンボールZ』も八九年四月から九六年一月まで放映。野沢さんは孫悟空に加え長男・孫悟飯と次男・孫悟天の声も担当した。

（注2）ゲゲゲの鬼太郎

水木しげるの漫画を原作とする妖怪アニメ。第一シリーズはモノクロ作品で、一九六八年一月から六九年三月まで放映された。第一シリーズに加えて、七一年十月から七二年九月の第二シリーズでも野沢さんは鬼太郎を演じた。

番ですから、失敗したら失敗したまま放送されます。私はまだ一〇代。怖いもの知らずで、思いつ切りやりました。劇団で鍛えられているのでセリフを覚えるのは、長くても全然苦になりませんでした。そういう意味では声優に向いていたと思います。今では私にはそういう役は当たりませんが、最初のころは、女性の声の吹き替えでした。しばらくすると少年の声の吹き替えの役募集がかかりました。生本番の収録ですから、トチったらそのまま放送される。そうした酷な仕事を子どもに任せるわけにいきません。大人の男性の役者で適任の人がいればよかったです。ところが、声変わりしているから少年とは似ても似つかない野太い声でしょう？　そこで女性にその役をしてもらおう、ということになったんです。私は何の役か知らずにオーディション会場入り。そこで台本を見て、初

めて少年の役だと知ったんです。正直驚きましたが、自分なりに一生懸命やって、幸い合格しました。その作品、評判が良かったんですが、それは私の声のおかげではなく、お茶の間で洋画を日本語の吹き替えで観る、ということが受け入れられたからなんです。時代を物語っていますね（笑）。その洋画の視聴率が良かったことをきっかけに、少年役の声優となれば私に声がかかるようになりました。

——『鉄腕アトム』(注3)でも少年役を演じられました。

野沢 『鉄腕アトム』は、私の初めてのアニメ出演でした。アニメは洋画の吹き替えとは勝手が違うので最初はかなり戸惑ったことを覚えています。と言いますのも、吹き替えは向こうの役者の声が入っていますので、その声が流れてきたらすぐ声を当てればいい。「このテープでやればびったりはまる」

という感覚を、それまでの吹き替えの経験で持っていたんです。しかし、アニメの場合は、吹き替えと違って声はありませんから、キャラクターの口の動きを見て声を合わせるんです。アニメで声を合わせるタイミングを自分なりに習得することに集中しました。

その後、『ゲゲゲの鬼太郎』で鬼太郎の声をやらせていただき、アニメで初めて主演を務めました。そのころからでしょうか、声優という肩書で呼ばれるようになりました。元々は舞台女優を目指していたから声優と呼ばれるのは大嫌いだっただけです。でも今は声優が

大好き。私自身、女性でありながら、数え切れないほどの「僕」や「俺」、「オイラ」を演じてきました。生身では絶対になれない少年にも、声優を通してなれるんですから、こんな面白いことはありません。そのキャラクターを生かすも殺すも声優の声ひとつ。だから、とてもいいお仕事だと思っています。私は声優。胸を張ってそう言えますし、声優という仕事は私の全てです。

(注3) 鉄腕アトム
手塚治虫の漫画を原作とするSFアニメで、国産初の三〇分の連続テレビアニメ。一九六三年一月から六六年十二月まで放映された。後にカラーでリメイクされた。

病の少年に届けた「孫悟空」のメッセーじ

——いろいろなキャラクターを演じてこられました。役作りはどのようにされるのですか。

野沢 「こういうふうにセリフを言おう」と頭で考えることは



のざわ・まさこ ●東京都出身。3歳のころから子役として映画などで活躍。高校卒業後、劇団で舞台の芝居に打ち込むようになる。10代後半からは声優の活動もスタート。テレビの洋画の生吹き替えから始まり、『鉄腕アトム』の第1作で少年の声を務め、アニメデビュー。『ゲゲゲの鬼太郎』の第1作で鬼太郎役を担当して、初主演を果たし、第6期では父親の目玉おやじ役を演じた。その他、主な出演作は『ドラゴンボール』シリーズ（孫悟空、孫悟飯、孫悟天）、『ど根性ガエル』（ひろし）、『銀河鉄道999』（星野鉄郎）、『あらいぐまラスカル』（ラスカル）、『怪物くん』（怪物くん）、『ONE PIECE』（Dr.くれは）など多数。『なるほど！ザ・ワールド』などでナレーションも務めた。2013年に第7回声優アワード功労賞、14年には東久ひがしくにのみや瀧宮文化褒賞をそれぞれ受賞。18年には「児童福祉文化賞 特別部門」も受賞している。

ありません。キャラクターの育ちや性格からどんな声を出すのか、自分で想像を膨らませて、自然体でその役に入り込んでいきます。例えば『ドラゴンボール』の悟空の声では、オーディションのときは、声がスッと自然に出た感じでした。後から聞いたところ、原作者の鳥山明先生が二〇〇人ほどの声の録音テープから「あつ、悟空はこの

声だ」と、パッと決められたそうです。—— 続編の『ドラゴンボールZ』では悟空、悟飯、悟天の三役を一人で演じていらっしやいます。野沢 三人それぞれ育ちや性格が違うので、しゃべり方を変えなくてはいけません。悟空はまったくの野生で育っていますが、長男の悟飯は教育ママ

の母親がついていて優等生に育っています。次男の悟天はやんちゃなところがある。そのようなキャラクターづけを自分の中に入れて、しゃべり口調とか、出す声音を変えていきます。そんなふうには、そのキャラクターのイメージを自分の中で膨らませながら声を演じてきました。ところが、原作者の方から「もっとこんな感じの声に変えて」と

注文がついたことは一度もありません。うれしいことに『ドラゴンボール』の鳥山先生は、漫画の原稿を描いているときには「僕の頭の中で悟空や悟飯、悟天が野沢さんの声で勝手にセリフをしゃべり始めたんだよ」とおっしゃるんです。これはもう声優として願ってもない幸せな言葉でした。

—— 人物以外のキャラクターの声も演じていらっしやいます。印象に残っているのは『あらいぐまラスカル』（注4）です。ラスカルは人間の言葉を話さず、鳴き声だけでした。

野沢 ラスカルの役は私からお願いしてオーディションを受けさせてもらったんです。セリフではなく鳴き声しか出さ

（注4）あらいぐまラスカル 米国のスターリング・ノースの実話をもとにした小説が原作。一九七七年一月から十二月まで放映された。スターリング少年と、ラスカルと名付けられたアライグマの子どもの交流を描いている。

ないからこそ、やってみたかったですね。鳴き声だけでいろいろな感情とか気持ち表現してみたかった。当時の私にとっての新たな挑戦でした。

—— 実際、アライグマはどんな声で鳴くのでしょうか。

野沢 私がラスカルにアフレコしたような声で鳴きます。これ本当です。上野動物園に通い続けて、どういう鳴き声か聞いてきましたから。アライグマって、めったに鳴かないんです。通い始めて一〇日ほどたったある日、手に持っていたお芋を地面に落とす瞬間に「クワン」と、たった一言鳴きました。これだ！ と思って、頭の中に入れたんです。

台本にもラスカルのセリフは鳴き声しか書いてありません。例えば、「ラスカル、どこへ行きたい？」というスターリング君の問いかけに、「ミー」という鳴き声を書いてあるだけ。私はそこに「公園に行きた

い！」って、ラスカルの気持ちを書き込んでいました。ラスカルの気持ちを考えて鳴くというより、私がラスカルそのものだから、いつでも自由に鳴ける、そんなラスカルと一体となった感じになっていきました。

—— 『ドラゴンボール』が好きな男の子に、野沢さんが孫悟空の声でメッセージを贈ったという記事を読みました。その男の子は重病で、余命宣告を受けていたと。

野沢 男の子のお父さんから手紙が届いたんです。ある年の二月の初めでした。「息子は、今月いっぱいには持たないと医者から言われている。それでもいつもベッドで『ドラゴンボール』を観ている。八月公開の映画も観に行くと言った。本人は言っているが、それは絶対無理なので、最後のプレゼントに野沢さんのサインをあげたい」——。同封されていた色紙にサインをしてから、私は録音を担当

する方に頼み、男の子へのメッセージをテープに録ってもらいました。「オッス！ オラ悟空空！ ○○くん、八月の映画に絶対来いよ、オラ劇場で待つてっからな！」って。男の子は命をつなぎ、映画を観に来ることができたんです。それまでベッドで寝たきりだったのに、この映画は椅子に座って観るんだって、上映中ずっ

と起き上がることもできたのだそうです。そして、映画の翌日、男の子は旅立ちました。お父さんからの知らせに、私はもう、泣けて泣けて……。でも旅立ち前に喜んでもらえて、よかったなど。本当にアニメですごくいいなとも思いました。私じゃなくて、アニメの力がすごいんです。

日常生活の観察から「引き出し」を増やす

—— 声優の仕事をする上で喉は生命線だと思えますが、心がけていらっしゃることはありますか。『ドラゴンボール』などは戦闘シーンで叫ぶことも多いと思いますが。

野沢 そうですね、風邪を引かないようにしていることと、うがいや毎日するくらいでしょうか。私はどんなに叫んでも大

丈夫です。喉に気を使う声優さんは多いですが、私は特別なこととはしていません。声帯が丈夫みたいです。

私の場合、喉の使い方が声帯を長持ちさせているのかもしれない。声のトーンには上も下も「ここまで出せる限界」があります。声優さんの中にはその幅いっぱい使う方がいます



が、そうすると、声に余裕がなくなり芝居ができなくなり。私は声域いっぱい使わず少し加減しています。こうした喉の使い方は、舞台の芝居で会得していたことなんです。声優の世界でも大いに役立つと思います。

— 最近では声優に憧れ、声優養成所や専門学校などに通う若者が増えています。こうした状況をどのように見ておられますか。

野沢 声優界にとっていいことだと思えます。私が声優を始めたころは、声がかかった

劇団から声優を選んでいたわけですが、それでは世界が狭いでしょう。いろいろなところからたくさん出てきたほうがいい。声優の仕事で食べていける人がさらに増えてきたら、もつといいと思います。

— これから声優を目指す人の育成にも取り組んでいくお考えでしょうか。

野沢 私は誰かに教えるよりも自分で演じるほうが好きですね。以前は教えていたのですが、いまだに教え子から「怖かった」と言われます（笑）。長い間劇団にいたせいか、滑舌一つだけでも気になって、「音が違う！」って突っ込んでしまうんですね。

けれども、それくらい厳しく鍛えられなかったら、この世界では生きていきません。声優を目指している人たちは多いですが、デビューできる人は一握りでしょう。一見、華やかな世界に見えるかもしれませんが、

声優になるのは簡単ではありません。声優になれても、いつも自分を磨いていかないと、伸びていけないと思います。

— 声優として伸びるために、何をしたらいいでしょうか。

野沢 声の引き出しを増やすことだと思います。演じる役の幅が広がりますから。私は若い声優たちに、「普段から人間観察しなさい」と繰り返し伝えてきます。電車に乗るときはホームにいる人や、車内にいる人たちのしゃべり方や声に耳を傾けてみよう。それを自分の引き出しに入れておく。役をもったときに、その引き出しから声音をつくる。引き出しの種類が多いほど、声優としての可能性は広がっていきます。いろいろな経験を自分のものにして生かす、声優にはそういう姿勢が必要なんです。

— 本日は、ありがとうございます。

（聞き手／情報サービス局長 林新一郎）